



<悪意>が転移する従順な<僕>の身体：
大江健三郎「奇妙な仕事」論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎, 正純 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00002617

〈悪意〉が転移する従順な〈僕〉の身体

——大江健三郎「奇妙な仕事」論——

山崎正純

I 当事者

大江健三郎の「奇妙な仕事」⁽¹⁾が東大新聞の五月祭記念号に懸賞小説当選作として掲載された時の印象を江藤淳は「編集者に突然仕事への情熱をあたえるあの佳作のひとつであった。そうだ、この作家に書かせよう、と思いつながら、私は新聞をほうり出して立ちあがった。」と回想している。⁽²⁾一九五七年五月のことである。岩波の『思想』に加藤周一「サルトルと共産主義」が掲載されたのが同年同月。前年の一九五六年、ソ連共産党第20回大会でフルシチョフがスターリン批判を行い、人民を党が、党を書記長が代表するという論理で個人崇拜による恐怖政治が強行される「スターリン主義」が批判された。急激な工業化と農業集団化を推進する目標を達成するため、強圧的に党内外の反対派、異論派、民主派を排除する〈大粛清〉を党自らが否定

することが、〈テロの否定〉という単純な論理で割り切れないものであることは明らかで、当時から轟々たる議論を巻き起こしていた。そしてその渦中にハンガリー事件が起こったのである。加藤周一の「サルトルと共産主義」は、そうした国際情勢の緊迫に対応して書かれた「スターリンの亡霊」を中心に、サルトルによる「スターリニズム」の理論的解明の概要を報告したものであった。加藤の文章以前にも丸山眞男が『思想』（一九五六年十一月）に「スターリン批判の批判——政治の認識論をめぐる若干の課題」を書き、個人崇拜とそれを生み出した組織の論理の問題は別であることを指摘していた。無名の大江健三郎が「奇妙な仕事」の構想を練り、原稿用紙を埋めていたのは、そのような状況下においてであった。

「奇妙な仕事」とは、大学病院に実験用として飼われている犬一五〇匹を撲殺するアルバイトのことなのだが、そもそもこれ

ほどの数の犬をなぜ撲殺することになったのか。作品は、その理由をこう語っている。

病院で実験用に飼っていた一五〇匹の犬を英国人の女が残酷だということで新聞に投書し、それらの犬を飼いつづける予算も病院にはないので一度に殺してしまうことになり、その男が犬の処分を引受けた。皆さんも解剖のことや犬の習性についてや、いろいろ勉強にもなることですから。

劣悪な環境で実験用に飼われ続けることと、「一度に殺してしまうこと」とを繋ぐ論理は「それらの犬を飼いつづける予算も病院にはない」という当事者の抱える事実以外にはない。「英国人の女」の新聞への投書が世論を動かしたということは推測できる。だがこの世論は「英国人の女」の署名入りの主体、言い換えればそれに対して反論可能な発言の主体として存在しているのではない。にもかかわらずこの世論を無視することはできないのだ。ここに露呈しているのは、「英国人の女」の動物愛護精神という〈文化〉的意思が、反論不可能な不可視の圧力となつて、当事者を意のままに動かしている光景である。世論が行使する権力は、その強大さにもかかわらず常に非当事者性を帯

びることを免れない。一方、当事者がひとたびこの世論に取り巻かれると、動物愛護精神が一五〇匹撲殺という行為を結果しても、その論理的な撞着にこだわっている暇はない。世論は当事者を動かすが、動かされた当事者は、当事者の論理に従って動く。その意味で、世論とは〈文化〉的な同化圧力でありながら、非〈文化〉的な現実からは常に遊離しようとする。一方、当事者性とは常に状況に応じて利潤を稼ぐ利害関係で動いている。仮に病院の当事者が一五〇匹の犬すべての引き取り手を探し出したとしても、この事情には変わりはない。当事者性とは、与えられた現実の中で、その現実に基づく行爲することだからだ。世論は突然訳もなく、当事者の現実を別の現実に変更するよう命じてくる。〈文化〉としての世論に対する反論ははじめから封じられているのであり、当事者は黙々と新しい現実に向けて行爲する他ないのだ。

江藤淳は「神話の克服」（『文学界』一九五八年六月号）の中で、「世論」が「有機的な骨なしのバクテリアのように自己運動する生きた個体」であり、「個人の主体的意見の集合をあらわす名前であったはずの『世論』が、ここでは、あいまいな実態を持ち、ムードを喚起するもの」に変質してしまったことを論じて次のように大江の発言を引用している。

これについての興味深い实例は、大江健三郎氏が「日本読書新聞」(一九五八年三月三十一日号)に書いた文章に示されている。それは、南極観測隊のカラフト犬を殺すのはあたりまえだといった彼の発言に憤激した『世論』についてかたっているものであった。

《世論は、個人的に責任をおう署名入りの発言の集合であるべきである。．．．ところが奇妙な事情がある。一つの確固とした存在として〈世論〉を仮想し、それに自己を埋没させて、署名のない発言をする者たちがいるのだ。彼らは暗い奥底から棒をふるって僕を殴りつける。僕が殴りかえすためにふるいたつと、彼らはいない。「世論」の亡霊がまぬけた図体をのろのろあらわすにすぎない。．．．この空虚でヒステリックな「世論」の亡霊へ、これら投書家ほど単純でない、悪意に満ちた力が作用しはじめた時、その時なにおこるか。マツカシー旋風のように完璧な範例がある以上、僕は危機感からのがれることができない》

米国上院議員マツカシーが国務省内に赤色分子がいるとしてそれらの追放を要求し、上院の政府活動特別調査委員長として「赤狩り」に専念した。政治家から芸能人にいたる多くの人

〈悪意〉が転移する従順な〈僕〉の身体

物が弾圧を受けた「マツカシー旋風」は一九五〇年から一九五四年頃までに進められた反共活動であった。「亡霊」のとき世論のとらえ難さが「マツカシー」のような「悪意に満ちた力」によって形成、操作されるとき恐怖感を、大江はここで「僕は危機感からのがれることができない」と述べたのである。「マツカシー旋風」は「その完璧な範例」と大江は言うが、いうまでもなく〈スターリニズム〉の〈大粛清〉こそ〈マツカシーシズム〉の更なる「範例」となるものであった。だが世論とはいわずれにしても「空虚でヒステリック」であり、「亡霊」のごとくその正体を現さないまま、標的となった獲物のイデオロギーを暴露しにかかってくるのだ。〈スターリニズム〉〈マツカシーシズム〉と「英国人の女」の投書は、利害打算で生活する当事者の振る舞いから排斥すべきイデオロギーを嗅ぎだし、一方的に生活の基盤を奪っていくという点で、まさに「旋風」＝ハリケーンに他ならない。

犬撲殺のアルバイト募集に応じた三人の大学生(「僕」「女子学生」「私大生」)に与えられた役割を、作品はこのように描いている。

倉庫前に作られた囲いの中へ僕が犬を引いて行き、犬殺し

が殺して皮を剥いだ死体を私大生が運び出して男に渡した。女子学生は皮の整理をした。仕事は捗どつて朝のうちに十匹を処理した。僕はすぐ仕事に慣れた。

ここには犬撲殺の仕事に当たる当事者の無駄のない動きが描かれている。三人の学生が「犬殺し」の男を中心に正確に事を処理していく。彼らはそれぞれの役割分担に従い犬撲殺を遂行しながら、それぞれの〈行為〉がもたらすであろう報酬を期待している。「犬殺し」が皮を剥ぐのはそれによって得る報酬のためであるし、三人の学生もアルバイトの「ペイ」を期待している。〈行為〉は未到来の報酬を実現するための、いわば〈創造〉的行為でなければならない。当事者性とは、そのような〈創造〉的行為によって獲得されるものでなければならない。

II 十字路

だがそれにしても、彼らに与えられた役割が、なぜ犬撲殺でなければならないのか。彼ら当事者となった者たちの〈行為〉は、新聞の投書によって喚起されたのであろう世論と、「それらの犬を飼いつづける予算」がないという病院職員の言い分に、最終的には奉仕するものでしかないのではないか。彼らの〈行

為〉は「ペイ」によって報われる以前に、これら一方的な主張によって立ち足はだかる〈社会〉的な圧力によって搾取されている。手際よく〈行為〉すればするほど、その〈行為〉はある大きなねじれを強いられることになる。

江藤淳は「大江健三郎の問題」(前掲)の中で次のように指摘している。

ここでいう「奇妙な仕事」とは、換言すれば「存在すること」、現代の日本に生きるという「仕事」のことにほかならない。「存在すること」のなかには、あるねじれがあつて、人はそのなかで徒労に耐えながら生きるというのが作者の認識であるが、作者はこの認識を得ることによって、逆に徒労から自分を救済しているのだともいえる。

江藤淳はおそらくここで、サルトルの想像力論を援用している。しかしこの援用には〈存在〉と〈実存〉との関係についてのある不徹底な抽象があつて、そのために「存在すること」と「現代日本に生きる」こと、さらには「生きること」と「仕事」との関係が不明瞭になっているという憾みがある。江藤はここで、現代日本社会の現実の中で〈行為〉＝「仕事」をすることに

よって、はじめて「存在すること」がねじれを含み、そのねじれを通じてしか〈実存〉を掴めないこと、すなわち〈実存〉によつてしか〈存在〉のねじれの根源を〈想像〉し得ない、というべきであつたのではないか。

吉本隆明はサルトルと江藤淳との関連について論じた文章の中で、サルトルの唱える想像力が、「疎外された労働」のあるところで「意識外の意識」として産み出されるのだと述べている。⁽³⁾

では、想像力とはなにか。人間の感覚は、現実にたいするはたらきかけをつうじて、そのはたらきかけの態様によつてしか発達しない。そしてこの発達を本質的にきめるのは生産にたいする労働の態様にほかならない。しかし、人間の感覚を本質のまわりでしだいに複雑に肉付けさせるものは、現実の社会での複雑な関係である。恋愛によつても、不和によつても、遊戯によつても、人間の感覚はじつさいには肉付けされてゆく。そして、疎外された社会では、いかえれば疎外された労働のあるところでは、人間の感覚の現実的な肉付けと本質的な発達との矛盾は極端にまでおしすすめられるのである。

もしも、人間の感覚を肉付けする社会の現実的な諸関係

〈悪意〉が転移する従順な〈僕〉の身体

が、感覚の本質をきめる生産諸力の態様と矛盾をきたすようになると、人間の意識は意識外の意識というべきものを概念作用と感覚作用のあいだにうみださざるをえなくなる。

(想像力派の批判)

「わたしはこれを想像力とよばざるをえないのである」と吉本が語るとき、犬撲殺という「疎外された労働」は、「疎外」それ自体を生み出す「矛盾」の外部へと伸び上がり、「現実の社会での複雑な関係」を照らし出す意識、すなわち想像力を生み出すものと理解されよう。そして、このような想像力の発現する場を、大江は作品冒頭ですでに描いているのである。それは「十字路」に立ち止まる「僕」の意識として描かれている。

附属病院の前の広い舗道を時計台へ向つて歩いて行くと急に視界の展ける十字路で、若い街路樹のしなやかな梢の連りの向うに建築中の建物の鉄骨がぎしぎし空に突きたつているあたりから数知れない犬の吠え声が聞えて来た。風の向きが変るたびに犬の声はひどく激しく盛上がり、空へひしめきながらのぼつて行くようだったり、遠くで執拗に反響しつづけているようだったりした。

この「十字路」は莫大な予算を投入して建設中の大学構内の建造物と、一五〇匹の犬を飼う予算がないために撲殺されるのを待っている「犬の吠え声」が交錯し、ほとんど無数の当事者がひしめき動く「現実の社会での複雑な関係」から発した「吠え声」が「空へひしめきながらのぼって行く」場であり、やがて犬撲殺の当事者となる「僕」の日常生活の基盤を突き破って「執拗に反響」する特異な場所として設定されている。この「十字路」に立つとき、「僕」は「意識外の意識」を生み出さずにはいない疎外された〈行為〉そのものと化すのである。だがこのときの「僕」には、そのことを理解することができていない。なぜなら「僕」の理解している世界は一種の〈平和〉、全てが色褪せて疲れていて、それでいてなお〈平和〉以外の言葉ではそれを表現し得ないという意味で、やはり〈平和〉としか言いようのない世界に生きているからである。

犬たちは極めて雑然としていた。ほとんどあらゆる種類の犬の雑種がいた。しかし、それらの犬は互にひどく似かよっていた。大型の犬や小型の愛玩用の犬、それにたいしては中型の赤犬が杭につながれていたが、それらは互に似かよっていた。どこが似ているのだろうか、と僕は思った。

全部、けちな雑種で痩せているというところか。杭につながれて敵意をすっかりなくしているところか。きつとそうだろうな。僕らだつてそういうことになるかもしれないぞ。すっかり敵意をなくして無気力につながれている、互に似かよつて、個性をなくした、あいまいな僕ら、僕ら日本の学生。しかし僕はあまり政治的な興味を持ってはいなかった。僕は政治をふくめてほとんどあらゆることに熱中するには若すぎるか年をとりすぎていた。僕は廿歳だった。僕は奇妙な年齢にいたし疲れすぎてもいた。僕は犬の群れにもすぐ興味をなくした。

「僕」が生活感情を汲み上げている世界の光景は、このような言葉で語られる。「けちな雑種」、「杭につながれて敵意をすっかりなくし」、「無気力につながれて」、「個性をなくし」、「熱中するには」、「疲れすぎて」いる「僕ら」。撲殺されるのを待つ犬へのまなざしは、「僕ら」という収束点に向けて回帰してしまふ。「僕は犬の群れにもすぐ興味をなくした」。撲殺するのは誰か別の人物でもあるかのように。

だが、なぜ「僕」ではなく「僕ら」なのか。「僕ら日本の学生」なのだろうか。「政治をふくめてほとんどあらゆることに熱中

するには若すぎるか年をとりすぎていた」という「僕」の世代感覚は、歴史的連続性に対して亀裂を鋭く走らせ、合理的歴史意識に対する相対的独自性を主張するパセティックな世代論的自己主張とは異なるといわざるを得ない。すなわち、当事者性の自己意識がいまだ稀薄であるために、汎合理論的な同化圧力への抵抗意識が擬似世代的な同類意識の中に解消してしまっているのである。そこには非合理的であることへのデモニーシユな欲望すら欠落している。⁽⁴⁾このような世代意識への逃避は、現実世界の疑うことのできないほど明らかな近代化と、相対的な〈平和〉の中に包まれてしまうことへのかすかな抗いとみることもできるだろう。しかし、「僕ら」がそこから逃避しようとする「平和」を背後からささえていたのは、米国のヘゲモニー戦略としてばら撒かれた、近代化⁽⁵⁾工業化に成功した儒教文化圏で唯一の国という言説にほかならなかつたのではないか。⁽⁵⁾

したがって作中の「僕」が、「十字路」に立つときに感じる揺らぎは、擬似世代論的な「僕」の自己了解を粉碎しかねないものとして、作品冒頭に置かれているのだ。「学校の掲示板でアルバイト募集の広告を見てから、それらの犬の声は濡れた布のようになり僕にまといつき、僕の生活に入り込んで来たのだ。」という一節が語るのは、撲殺される犬をとり巻く「現実

の社会での複雑な関係」への想像力が、「僕」の平板な世界了解を揺るがし始めたということなのである。あの「十字路」は確実に「僕」の内部に転移したのだ。

III 火山

「犬殺し」の男が「息がつまるほど卑劣なやりかた」で犬を殺していく。三人の学生は、その「卑劣さ」をどう非難しようと、彼らが「犬殺し」の男の指示通りに動く忠実な助手であり、犬撲殺の当事者であるという事実は動かしようがない。だが「僕」がこの「卑劣さ」を受け入れるしかなかったのは、それが「僕」の思考の弱点を突きつけてくる何かだと感じられたからであった。

なんという卑劣さだろう。しかし今、眼の前で犬を処理している男の機能的な卑劣さ、すばやく行動化された卑劣さは、すでに非難されるべきではないと思われた。それは生活意識の根底で極めて場所をえている卑劣さだった。

ここには普遍的な「卑劣さ」を超えてしまう「生活意識の根底」の発見が語られていることは明らかだ。いかなる正義も社

会的習慣の束の一つでしかない。普遍的正義という言説のまやかしが、「犬殺し」の男の「息がつまるほど卑劣なやりかた」によつて暴かれてしまう。新聞に投書した「英国人の女」の信じる正義と、「犬殺し」の男の信じる正義は、いずれも相対的なものでしかない。それは確かだ。だが、ここで「僕」が納得したのはそのような相対主義の理路ではない。「英国人の女」の信じる〈文化〉的正義は、〈生活意識の根底〉で守られてきた「卑劣さ」に劣るのだということ、いわば「卑劣」が正義に転ずるといふ驚くべき反論理によつて「犬殺し」の男は生きている。その反論理は、次のような場面によつてより明瞭に輪郭を現す。

俺に毒を使えとすすめるやつがいるんだ、と犬殺しはいつた。

毒を？

そうなんだ。俺はしかし毒は使わない。毒で犬を殺す間、日陰でお茶を飲んでいようなことを俺はしたくない。犬を殺す以上は、犬の前に棒をもつて立ちふさがらなくちゃ本当でないだろう。俺は子供の時からこの棒でやつて来たんだ。犬を殺すのに毒を使うような汚いまねはできない。そうだろうな、と僕はいつた。

それに、毒を使うとね、死んだ犬が厭な臭いをたてるんだ。犬には良い匂いをたてて、湯気をあげながら皮を剥かれる権利があると思わないか。

僕は笑つた。

そうだ、その権利があるんだ、と犬殺しはまじめにいつた。俺は毒つかいどもとは訳がちがう。俺は犬を好きだからな。

「僕」の観念性は、「犬殺し」の「俺は犬を好きだからな」という「まじめ」な言葉によつて否定されたといえる。なぜなら「僕」の生活を満たしている観念は、新聞に投書した「英国人の女」のそれと変りはしないからだ。実験用に飼われることが、犬にとつて残酷なことだということと、「犬殺し」の男を「なんという卑劣さ」と眼を背けた「僕」との間に、違いがあるはずがないからだ。「犬殺し」の言葉の放つ野蛮な響きは、様々な事情で捕捉され殺されることとなつた犬たちを、殺さなければならぬ男から発散する臭気だが、殺さなければならぬ男から蓄積された取替え不可能な人生の時間の延長上で、同じ仕方ですすのが最も倫理的なやり方だということになるのだ。なぜなら犬の死と「犬殺し」の人生と

が寸分の隙間もなくそこで向き合い、同じ重量で互に相手を支えあうからだ。犬の死と「犬殺し」の生とは、同じだけの価値を持ってその尊厳を映し出す鏡なのである。毒殺ではなく撲殺を選ぶことによつて、「犬殺し」は彼の人生の全体で犬の死を弔うのだといつてもよいだろう。

だが作品はもう一人の人物である「女子学生」の口を通じて、「犬殺し」の男の生活意識を再度相対化させるのである。「僕」の観念性とは異なる彼女の眼差しは、「犬殺し」の示す意外な倫理性を、当事者として生きる者すべてが持っている「生活の中の文化意識」と捉え、「汚らしくて、じめじめして根強くて、似たりよつたり」のものだと言う。

生活の中の文化意識、と女子学生はいった。桶屋の技術が桶屋の文化だ、そういう文化が生活としつかり結びついた本当の文化だ、というようなことを評論家が書くでしよう。あたりまえなことだね。ところが、一つ一つ実例をあたつてみるとね、そんなにきれいなことじゃないのよ。犬殺しの文化、淫売の文化、会社重役の文化。汚らしくて、じめじめして根強くて、似たりよつたりよ。

「その厭らしい文化に足をつっこもうとしているの？」という「僕」の問いに、「足をつっこむとかなんとかいうのじゃなくてね、もうみんな首までとつぷりつかっているのよ。伝統的な文化の泥で泥まみれなのよ。簡単に洗うことはできないわ。」と「女子学生」は答えている。

人間は生きていく限り当事者であるほかない。そうでなければ生きることができない。これは、人間は社会的な動物だといふのと同じ事を言っているに過ぎない。だがその当たり前なことを、「そういう文化が生活としつかり結びついた本当の文化だ」と「評論家」が書くのは、近代化・工業化の高度化がもたらしたコミュニケーション手段の膨張と、それにもなう「新中間層」の出現に対するカウンターアクションであることはいふまでもない。ところが「女子学生」の眼差しに捉えられているのは、そのような社会現象の「境界」なのである。すなわちここには、次のような問題が媒介項として挿入されているのだ。吉本隆明の「情勢論」からの引用である。⁶⁾

さきに、大家、中堅たちの論説にふれながら、良きにつけ悪しきにつけ、そこには今日の文壇、論壇のマス社会化現象を尻目にかけて動じない態度が秘されていることを指摘

した。しかし、彼らがじぶんの資質をかけ、思想をかたむけて発言した場合、かならずマス社会から疎外されるにきまつていることを熟知してないわけではない。また危惧も感じているはずである。これは、おそらく、彼らの思想が体制的か反体制的にかかわらない。かれらが、自己表現をすでに確立している、というそのことが、マス社会の画一化作用にとつては疎外の理由となりうるのだ。ここで出来るだけ、自己表現を潜在化させ、おし秘した方法で自己を表現する方法を編みださなくてはならない。これが、或る意味で私小説的手法の克服という外貌を呈することに注意しなければならぬ。大家・中堅作家の手法的な俗化（成熟とあやまれ易い）と、新人作家の自己暗喩（新手法とあやまれ易い）とを、わたしは、大体においてこのように解したい。

「犬殺し」の男が「俺は毒つかいどもとは訳がちがう。俺は犬を好きだからな。」といって拒絶した毒殺は、撲殺を野蛮として排斥する「マス社会」の犬の殺し方だ。この「犬殺し」は「じぶんの資質をかけ、思想をかたむけて」、棒による撲殺という手段をとり続けるかぎり、いずれは「マス社会から疎外されるに

きまつている」のだ。そして「マス社会」になじまない「汚らしくて、じめじめして根強い」様々な「生活の中の文化意識」が「マス社会」から取り残されたまま、底なしの沼のようなその「伝統意識」に「もうみんな首までとつぷりつかっているのだ」と「女子学生」は言うのである。

彼女は犬殺しの「ペイ」を「火山を見に行く」ために使うのだといって「静かな声で笑」う。

君はあまり笑わないね、と僕はいった。

ええ、私のような性格だと笑うことはあまりないのよ。子供の時だって笑わなかったわ。それで、時々、笑いかたを忘れたような気がするね、火山のことを考えて涙を流して笑ったわ。巨きい山のまん中に穴があいていてそこからむくむく煙が出ているなんて、おかしいなあ。女子学生は肩を波うたせて笑った。

君はお金をもらったらずぐ行くの？

ええ、とんで行くわ。山に登りながらおかしくて死にそうだと思うわ。

「風の向きが変るたびに犬の声はひどく激しく盛上がり、空へ

ひしめきながらのぼって行くようだった」という作品冒頭に描かれた「犬の声」のイメージと重なりつつ、「大きい山のまん中に穴があいていてそこからむくむく煙が出ている」というこの「火山」の噴煙は、「死体焼却場の大きい煙突」から立ち上る「淡い桃色がかつた柔らかな色の煙」、撲殺された五〇匹の犬の死体が焼かれる煙へと折り重ねられていく〈死〉のイメージなのではないか。「女子学生」は「煙の色がちがうのよ。ふだん人間を焼いている時より少し赤みがかつて優しい色だわ」と言い、焼かれているのが人間ではなく「犬に決まってるわ」と断言する。病院の予算がないために撲殺された五〇匹の犬の死体が、この現実に残す最後の生の証だ。絶対的に受動的であった死にふさわしい「少し赤みがかつて優しい色」「夕焼けた空」の色に似た「淡い桃色がかつた柔らかな色」。

しかし笑わない少女だった頃の「女子学生」が「涙を流して笑った」という「火山」は、「人間の死体を焼くため」の「死体焼却場の大きい煙突」でなければならぬはずだ。少女の笑いを奪った者達が、大人の人間であることは疑う余地がない。そして彼女は成長し「女子大生」になって、重症の脚気患者となり、今や「新薬」をすすんで飲む実験用の患者ですらある。大人になって「私たちはとても厭らしいわ」と「僕」に言う彼女

は、「山に登りながらおかしくして死にそう」になりながら、自身への死に向けて登りつめようとするのだ。実験用の犬を撲殺する仕事こそ、幼い頃の彼女を苦しめ、成長した彼女が苦しめた人々の生きる苦界を、彼女の身体もとともに焼きつくし焼き滅ぼすための所業なのである。

IV 傷口

「犬殺し」の男を雇い、三人の学生を使って犬撲殺の指示を出していた男が、犬の肉を肉屋に売り込む「肉ブローカー」だということが発覚して、「肉ブローカー」は逃げ、残された四人は意味もなく警官に睨まれてしまう。「僕」はこの直前に「赤犬」に飛び掛られ腿を咬まれて治療を受けていた。看護婦から「生きるか、死ぬかよ。時にはね」と「恐水病」の危険性を聞かされ、「ひどくおちこんでしまった」矢先の出来事であった。

「すっかり敵意をなくして無気力につながれている」だけの犬であったはずだ。その犬が、「老いぼれてぐらぐらしている」「汚い歯」で「僕」に歯向かったのである。「犬殺し」の男の毒殺否定の雄弁も、「ペイをもらったら火山を見に行くわ」といった「女子学生」のもくるみも、すべてが泡と消えた。ただ、「赤犬」に咬まれた腿の傷口が「少しずつ執拗に痛みはじめ」、「そ

れは静かにふくれあがった」。

僕らは犬を殺すつもりだっただろ、とあいまいな声で僕はいった。ところが殺されるのは僕らの方だ。

女子学生が眉をしかめ、声だけ笑った。僕も疲れきって笑った。

犬は殺されてぶっ倒れ、皮を剥がれる。僕らは殺されても歩きまわる。

しかし、皮が剥がれているというわけね、と女子学生はいった。

だが「僕」の傷口は、ただ皮が剥けた程度のものではないのかもしれない。包帯の下の「女子学生」には見えないところで、その傷口は「静かにふくれあがり、やがて「人間の死体を焼くため」の「火山」の形に変形していく。「死体焼却場の巨きい煙突」が「僕」の体内に転移していくのは、もはや時間の問題であろう。生き残った八〇匹の犬たち全てが、作品末尾で「吠えはじめ」、その「犬の声は夕暮れた空へひしめきあいながらのぼって行く。焼かれた犬の死体が煙となって昇っていった先を追うように、弔うように、犬たちは二時間吠え続けるのだ。」

残された八〇匹の犬も遠からず殺されるであろう。その犬たちが同じように煙となって空へ昇って行くとき、予算の不足を理由に撲殺を決めた当事者たちを焼くのは「僕」だ。なぜなら「僕」こそ、「死体焼却場の巨きい煙突」、あるいは「巨きい山のまん中に穴があいていてそこからむくむく煙が出ている」「火山」だからである。彼が殺した「赤犬」が残していった傷口が、「僕」をそのような存在として、人間世界にただ一人残していったのである。

大江健三郎の眼差しは、このようにして誕生した「僕」の人間世界への眼差しと、異なるものではない。その眼差しには、撲殺直前の「赤犬」の、人間世界への「悪意」に満ちた眼光が、尖鋭な輝きを放っている。

(注)

- (1) 大江健三郎「奇妙な仕事」(『東京大学新聞』一九五七年五月刊) 引用は『大江健三郎小説1』(新潮社)に拠った。
- (2) 江藤淳「大江健三郎の問題」(新鋭文学叢書『大江健三郎集』解説 一九六〇年 筑摩書房) 引用は『江藤淳著作集2』(講談社)に拠った。
- (3) 吉本隆明「想像力派の批判」(『群像』一九六〇年十二月号) 引用は『吉本隆明全著作集4』(勁草書房)に拠った。
- (4) 橋川文三「若い世代の国家意識——歴史的観点から」(一九五

九年十月二十九日付『明治大学新聞』第八三〇号) 参照。『橋川文三著作集4』(筑摩書房)に「戦後世代の精神構造」として収載。引用は著作集に拠った。

(5) 和田春樹『近代化論』(『講座日本史9 日本史学論争』 東京大学出版会 一九七一年六月)、佐藤泉『戦後批評のメタヒストリー——近代を記憶する場』(二〇〇五年八月 岩波書店)第一部第三節『治者』の苦悩——アメリカと江藤淳』参照。

(6) 吉本隆明『今日の思潮』(『世代』 一九五八年七月号) 『吉本隆明全著作集13』(勁草書房)に「情勢論」として収載。引用は著作集に拠った。

(やまさき まさずみ・本学教授)

〈悪意〉が転移する従順な〈僕〉の身体